



東北の  
祭りの人々

写真家

# 岩波友紀のまなざし

にしきちょうとらまい  
錦町虎舞 岩手県釜石市

## Yuki Iwanami

東日本大震災のあと、一時は途絶えかかったものの今なお地元の人々の

思いをうけて続けられている東北のお祭りと、そこに生きる人々の姿です。



うすざわしおどり  
白澤鹿子踊 岩手県大槌町 (撮影場所/岩手県宮古市)



秋葉権現川原獅子舞 岩手県陸前高田市



さきはまねんぶつけんばい 崎浜念仏剣舞 岩手県大船渡市



おさきじんじや 御崎神社例大祭 宮城県気仙沼市

岩波友紀のことは

- 田舎を出た若者たちも祭りの日には必ず帰ってくる。
- 踊り手の少女たちは、「友達と会えるから」と踊りの披露を続ける。
- 離散した住民たちは、祭と芸能披露のときにだけ集まることができる。自分たちの故郷とつながることができる。いや、唯一のつながりを失いたくないからこそ、彼らは生活を差し置いてもどんな形でも残し続けていこうとしている。

岩波友紀写真集『紡ぎ音』より



村上の田植踊 福島県南相馬市(撮影場所/福島県福島市)



よりいそ だいくまい  
寄磯の大黒舞 宮城県石巻市



うしと  
請戸の田植踊 福島県浪江町



南津島の田植踊 福島県浪江町(撮影場所/福島県二本松市)

岩波友紀さんインタビュー

# 「命を守り、この大地で生きる」

おはなし◎岩波友紀 聞き手◎編集部

2011年、東日本大震災のあと、日本絵手紙協会が被災地へのお見舞いとして絵手紙うちわの支援を呼びかけ、全国から約3000枚ものうちわが寄せられました。うちわの発送作業の様子は読売新聞の

一面に小さく紹介されました。そのとき写真を撮ってくれたのが当時読売新聞社の写真部に所属していた岩波友紀さんでした。

岩波さんは、東日本大震災の取材をきっかけに「人間としていろいろなことに向き合っていきたい」と退社を決意し、フリーのフォトジャーナリストとして東北を取材し続けてきました。

震災から5年後、被災地の1500日を追った写真集を刊行、昨年には、今も行方不明のわが子を探す3組の家族を取材した写真集を出版しました。現在は福島に移り住み、東北の人々と同じ視点から震災と原発のその後を写しています。その写真は見るものにさまざまな記憶や感情を思い起こさせてくれます。昨年末には99枚組の作品集「紡ぎ音」で第4回入江泰吉記念写真賞というとても大きな賞を受賞。その写真群から今月はご紹介させていただきました。この10年、ずっと被災地と共に歩んできた岩波さんにお話を伺いました。



読売新聞 2011年6月9日付

東日本大震災の被災地に涼とエールを。東京都中央区の日本絵手紙協会の呼びかけで、全国の高齢者施設、小学校などから、お見舞いの絵手紙入りうちわ3000枚が寄せられ、現地へ発送が始まった。写真、岩波友紀撮影。

### いわなみ・ゆき

1977年、長野県諏訪市生まれ。写真家、フォトジャーナリスト。福島県会津へ移住。築100年の古民家を手入れしながら暮らしている。コニカフォトプレミオ、ユージン・スミス賞など受賞。被災地で続けられているいくつものお祭りを追った99枚の作品集「紡ぎ音」で昨年末に第4回入江泰吉記念写真賞を受賞。東日本大震災と福島第一原発事故のその後の人々の暮らしを取材し続けている。



## interview



大原浜の御神木祭 宮城県石巻市



鵜住居虎舞 岩手県釜石市

まずは「第4回入江泰吉記念写真賞」の受賞、おめでとございます。被災地のお祭りをテーマの一つにしたきっかけを教えてください。

ありがとうございます。震災後、取材をする中、がれきが散乱している町の中を山車だしを動かす人たちを見ました。その姿に神聖なものまで感じ、心を動かされた反面、身内を亡くし、家を失い、生活もままならないときに、どうして「祭り」を？という疑問が湧きました。「復興」を目指してがんばる姿。そんな簡単なヒロイズム(英雄主義)だけでは片付けられないものがあるのではないか。その奥にあるものを、知りたくなりました。

一つのテーマを追い続けることはとても時間がかかることですね。

写真を撮るって無駄なことが多いん

です。つまり、たとえば100日間撮影に行って、そのうち50日間の撮影分は全く、もう一生世に出ない捨て駒になったりするわけです。というより世に出ない写真の方が大半。写真集に載る100枚のほかに何万枚何十万枚と撮っているわけで。その無駄な時間の積み重ねの上で、最終的に作品集ができていると考えると、費やした無駄な時間が無駄ではなかったかもしれないと思うわけです。だから、その覚悟というか、新聞社を悩んだ末に辞めて、費やした時間がひよっとした結果には表れているかもしれないです。

写真はいつから撮り始めたのですか。

大学生の頃、バックパッカー(リュック一つで世界を旅する人)で、旅することがめちゃくちゃ楽しかったんです。インド、東南アジア、中東、東欧などたくさん回

りました。20歳くらいするとき、たまたま父の古いカメラを旅先に持っていったらそれがまた楽しくて。カメラがあると子どもたちが寄ってきてくれたり、コミュニケーションもとれて。

フォトジャーナリストになったきっかけを教えてください。

最初は旅して、写真撮って、面白いな、だったのが、訪れる国によってはそこから貧困といった社会問題も見えてくる。頭では知っていたことでも、写真に撮ると身近なこととして気になり始めて、ジャーナリズム系の写真にひかれました。大学の終わり頃、社会的な問題に興味をもって、バルカン半島のボスニア・ヘルツェゴヴィナへボランティアに。そこには当時コソボからの難民がいて、生まれて初めて

「難民」に出会いました。故郷を強制的に追われて、逃げなくてはいけないという立場を知り、それがもう衝撃的で。自分も故郷の諏訪が大好きだから、それを考えるとかなりきついことだと感じて。これがフォトジャーナリストを目指すきっかけです。この体験は福島原発事故で故郷を追われる人々取材することにもつながっています。

故郷を愛する思いがきっかけだったのですね。ところで岩波さんは長野県諏訪市のご出身ですが、東北とのご縁はあったのですか。

新聞社時代、仙台の支局に3年いて、東北6県をすべて担当して、東北の人たちの控えめな人柄、前に出ないところとか、伝統的な文化が残っていると

るどかに触れて大好きに。田舎に暮らしたかったので、住むなら東北にしよう。東北は沿岸部以外は山に囲まれた土地で長野に似ていて安心できるんですね。あとは寒いところもいい。南国も憧れますが、やはり生まれたところの記憶があるからか寒々しい方が合っている気がします。

東日本大震災のあと7日ほどで現地に行かれたとか。

そうですね。仕事では自分の担当ではなかったため、有休を使って、そこから2か月近く単独で取材を続けました。以前仙台の支局にいたことが大きな原動力でした。その3年で東北が心の底から好きになった。その東北で大震災がおきた。写真をやっていくものとして、自分と関



千歳の大漁唄い込み 岩手県大船渡市



三嶋神事例大祭 宮城県南三陸町

わりが深いと感じているものを無視できない、絶対に行かなくちゃと、もうそれだけででしたね。

現地ではどのようにして取材をしたのですか。

もう突撃です。とにかくフラフラと歩いて誰かに会えば話しかけて、何かを目的にという感じではなかった。交通事情の許すところから回って、そこで深い知り合いになるような人にたまたま出会うたりして。それが2冊の写真集にもつながっています。

悲しい場面も多いなか、撮影時に感情がこみ上げたりしませんか。

こういうと、お前人間かよと思われる

かもしれないですけど、9割9分ないですね。不思議なもので、カメラをのぞいているときはほぼない。フラットとも違います。「このときを写真に撮らないといけない」という勝手な使命感みたいなものが心を支配しているというか。無理やりそうしているのかもしれないですけど。ただ、後から写真を整理して見直しているときにぐっとくることはあります。

福島に移り住んで見えてきたことはありますか。

やはり原発のことですね。取材で通っていた時は完全なる他者でした。それが悪いとは言いません。客観的にみえる部分もあるからです。ただ実際に住んでみると例えば近所の人からももらったこの野菜を子どもたちに食べさせてもいいのか？



秋葉権現川原獅子舞 岩手県陸前高田市

ということとか、自分の生活に常に放射能が入ってくることはことのほか苦痛で、住まないとわからないことでした。

これからはどのような活動をされていきたいですか。

震災後からずっと気張ってやってましたが、これからは気張らずにこれまでのつながりの中でやっていけることをやっていきたいですね。新聞社を辞めたのも一つのテーマに時間をかけて、写真で表現していききたいと思ったからなので、そこはこれからも変わらないでしょうね。自然災害も、いまのウイルスもそうですが、共存以外に道はない。現れても最低限幸せに生きて行ける社会を考えなければなりませんと思っています。

——ありがとうございます。

編集部より

取材の最後、岩波さんに「絵手紙では感じる心を養うため、解説は後半に載せることが多いのですが……」とお伝えすると「最初にみて、予備知識なしで何かしら感じてもらうというのは僕も賛成です。それが自分の意図するものでなくても自由になんぞ見てください、と思います。もしもつと知りたいときは写真集やそこに載せた文章を読んでいただければうれしいです」とのお返事。岩波さんのお写真から皆さんは何を感じましたか。ぜひ感想を編集部にお寄せください。

岩波さんによる写真解説

- P 8 釜石祭りの朝、奥の院の神社に船で参拝に向かう。 続を決意したという。
- P 10 いわて三陸鎮魂復興祭に参加し、浄土ヶ浜へ。 下・県内外に避難する踊り手たちが安波祭の前日に集まる。宿で踊りの練習。
- P 12 上・津波が来た三陸の海を、岩場から舞い手が見つめる。 右・仮設住宅での餅まきに手を伸ばす。98軒だった大原浜の住所も今は28軒になった。
- P 13 川原地区で亡くなった消防団員の慰霊碑を獅子が噛む。 左・仮設住宅を門打ちして回る。
- P 14 上・子どもたちが大黒舞を披露。観客のお年寄りの肩を揉んで、お小遣いをもらう。 右・スルメを吊るした笹を持って、子どもたちが大漁を祈願して家々を回る。
- P 15 上・「ふるさとの祭り」に出演。道化役が使う馬の頭が津波の瓦礫から見つかり、踊りの存 左・4年に一度の例祭。神様を乗せて沖に出る。
- P 21 津波の犠牲者に黙祷する。裏表紙 2017年に浪江町の一部の避難指示が解除され、震災後初めて地元の神社で奉納。

岩波友紀のいっば

・震災があり、祭礼や芸能の意味はさらに変化した。集落そのものになくなったり、自分たちの土地から強制的に追い出され、住んでいる土地そのものつながりが断たれたのだ。それはその土地との神とのつながりが切れることでもある。そしてその土地とつながる唯一のものが祭りであり民俗芸能だけとなった。祭りと芸能を絶やさないとでしか、もはやつながる手段がなくなったのだ。

『紡ぎ音』より

\*撮影場所が記してあるものは、避難先など、本来とは別の地で開催されたものです。

## 岩波友紀のまなざし——写真集の紹介

### ◎写真集「One last hug 命を捜す」(青幻舎)

本体価格5000円+税 B5判 188頁 2020年発売

願いはただひとつ、もう一度抱きしめたい——。大川小にいた息子、南相馬で流された息子、帰還困難区域に眠る娘。今もなお、わが子を捜し続ける父親たち。彼らはなぜ捜し続けるのか、捜し続けられるのか。宮城県石巻市、福島県南相馬市、福島県大熊町の3家族の足跡を追った“命”のドキュメントです。



### ◎写真集「1500日 震災からの日々」(新日本出版社)

本体価格2800円+税 B5判 208頁 2016年発売

あの日から何日、と記された写真。誰もが大切な何かを失い、それでも生きる。「死と悲しみ、絶望があふれたあの時を経験し、命を守りこの大地で生きることを守るといふ一番大切なことのために何をしたら良いか。それをもう一度、考える機会になれば」(岩波友紀「おわりに」より)



20日 宮城県石巻市大川小



320日 宮城県南三陸町



17日 岩手県陸前高田市



946日 福島県双葉町



1459日 福島県いわき市

写真集の注文は下記のサイトへどうぞ  
<https://www.thephotjournal.org/shop>  
 (送料無料)

\*絵手紙株式会社では扱っておりません。  
 一般書店でもお求めいただけます。



「紡ぎ音」の  
 新刊本と写真展の  
 ごあんない

◎新刊本  
 『紡ぎ音』(入江泰吉記念写真賞実行委員会)  
 本体価格 4,000円+税 A4判 168頁  
 2月21日発売



表紙イメージ

### ◎写真展「岩波友紀 紡ぎ音」

会期/2月20日(土)~3月28日(日)

会場/入江泰吉記念奈良市写真美術館(奈良市高畑町600-1 電話0742-22-9811)

入江泰吉記念写真賞を受賞した「紡ぎ音」を展示します。

\*展覧会の最新情報は美術館のホームページなどでご確認ください。